其を玉加岐流とも呼べりと知られたり、然るに倭名抄に、○中略蜻蛉一名胡蝶和名加介呂布○中略と注されたるは、加岐呂布といふは、古名にて、當時なべて加介呂布といへるにあはせて、注されたるなるべし、醫心方には加岐呂布、又加太千、又加介呂布と注されたり、壒嚢抄にも蜻蛉といふは、大小のとんばうの揔名なりと云へり、さて萬葉に玉蜻蜓、玉蜻など書るは、タマカギロとよみて、今俗にヤンマと呼ぶものなるべし、○註略玉とは頭の大なる目ごめにあるが、透徹りて玉のごとく目にたちて見ゆる故に、玉カギロと呼たるなるべし、○中略さて此蟲をカギロフといふ義は、春の日影によりて見ゆるカギロヒにたとへたる名なるべし、さてそのカギロヒといふは、廣野などにて、春の日に影ろひて、中天に起昇る氣の見ゆるをいふ名にて、萬葉集に、かぎろひのもゆる荒野、かぎろひのもゆる春べなど見えて、漢名陽炎、遊絲、野馬などいへる、これに當れり、後世にかげろふといふこれなり、○註略さて此蟲の多く中天を徴に飛ちがふさまを陽炎にたとへて、カギロヒといひ、またカギロともいひ、其をまたカギルとも轉じいへるにて、カゲロフといふも、カギロヒを轉じていへるなるべし、

〔物類稱呼二動物〕蜻蛉とんばう　奥州仙臺南部にてあけづと云、津輕にてだんぶりと云、常州及上州野州にてげんざと云、西國にてゐんばと云、

〔重修本草綱目啓蒙二十七卵生蟲〕蜻蛉　トンボウ　トンボ　アキツムシ古歌　アキツハ同上　アキ

ツ南部　アケヅ同上　カゲロフ和名鈔　ヱムマ和名鈔、筑前、　ヱムバ同上、西國、　ヱンブウ筑前　ヱン

ボウ　ヤンマ共同上　ヘンボウ筑後　ヘンボ同上　ボウリ薩州　アカイス琉球　タンボ能

州　ダンブリ佐渡、津輕、　ダアブリ松前　ダブリ同上　ゲンザ常州、上州、野州、○中略

凡トンボハ春夏ノ交、水蠆（ヤマメ）○註略水ヲ出デ、蒲莞葉（ガマルスゲ）、或ハ水楊枝（カハヤナギ）上ニ緣リ上リ、背上罅裂シテ、羽化シテ飛ビ秋ニ至テ卵ヲ流水中ニ下シ、水蠆ヲ生ジ、翌年ノ春ニ至リ、復水ヲ出テ、蜻蛉トナル、○下略